



企業訪問レポート

独自の編み上げ技術を活かし、世界初のフルサイズカスタムオーダーシューズを発売

株式会社キタイ 奈良県香芝市

株式会社キタイは、早くからスポーツソックスに着目し、生産技術とノウハウを磨いてきた。その専門性を国内外の大手スポーツブランドから評価され、多くの高機能なスポーツソックスを世に送り出している。

2020年10月、同社は世界初のフルサイズカスタムオーダーシューズ「ergofit」を発売。ergofitは、3D足型計測器「INFOOT」のサイズ測定データを使った三次元成型編みによるニットアッパーシューズ（甲の部分がニット素材でできている靴）。軽くて通気が良く、靴紐がないため靴下を履いているような感覚が特徴である。実際に履き心地を体験した人は「左右違うサイズを履くとはこういうことか」と驚き、3人に2人は購入に至るといふ。同社は国内製造にこだわり、日本製ならではの高い品質と機能性をもつ高付加価値製品づくりに自信を見せている。

会社概要



会社名：株式会社キタイ
所在地：香芝市高32番地
電話：0745-76-2666
FAX：0745-76-2667
設立：1966（昭和41）年
代表者：代表取締役社長 喜多 輝昌
資本金：1,000万円
従業員：75名
事業内容：各種ソックス及びニット小物の製造販売
URL：<http://www.kitai21.co.jp/>

（右上から時計回りに）オリジナルブランド「ERGOSTAR」のランニングソックス／2020年10月発売のランニングマスク／後工程と倉庫業務を一元化した物流施設「KDC（Kitai Distribution Center）」



国内外の大手スポーツブランドに選ばれる高機能性靴下

株式会社キタイは、1951（昭和26）年創業。靴下の生産地として知られる奈良県香芝市で、早くからスポーツソックスに着目し、生産技術とノウハウを磨いてきた。その専門性を国内外の大手スポーツブランドから評価され、多くの高機能なスポーツソックスを世に送り出している。

スポーツソックスは、サッカーやバスケットボールのように動きの激しいものから、ゴルフやトレーニングのように緩やかだが長時間に及ぶもの等、種目により求められる機能性は多岐に亘る。そのため材料となる糸と編立技術の組み合わせによってそれぞれの合目的性に配慮したものづくりが必要になる。選択肢が多いほど差別化商品を生み易くなるが、一方で市場が小さくなるジレンマに陥る。しかし、それこそが同社のアイデンティティであると前向きにとらえてきた。

独自の開発力と特許技術でかつてない商品を生み出す

このような取組を可能にしたのは、同社の開発力である。業界に先駆けて、吸放湿性に優れた「紙糸」で編んだ靴下を製造。靴ずれのもととなる足の蒸れを防ぐとともに、強度の高い糸と組み合わせることで編み込むことで、機能性と耐久性を両立した。また、足を支えるため伸びにくいテーピング部分と伸びやすい部分との伸長率をコントロールして編む技術が特許を取得するなど、同社の独自技術は様々なスポーツブランドのOEM製品のみならず自社ブランド製品にも活かされている。近年では、奈良県靴下工業協同組合のプレミアムブランド「The Pair」への出品を通じて、奈良靴下産地の活性化に一役買っている。

こうした中、編み機メーカーが新たに靴を編むことができる機械を発表。他社が投資を見送る中、

喜多輝昌社長はあえて編み機を購入した。これまでの技術を応用すれば製造も可能ではないかという見込みがあったためである。「当社が昔から当たり前のようにやってきた立体編み技術でサイズバリエーションが展開できれば、発想の違う商品にできる。我々の培った経験が活かせると感じた」と喜多社長は当時を振り返る。

新分野への進出に向けて靴の市場を調査するうちに、多くの消費者が既成靴のサイズに不満を抱えることが見えてきた。喜多社長は、それぞれの足にフィットさせるにはカスタマイズしかないと考え、自ら指揮を執り、靴下業界で初めてオーダーシューズの分野に参入することとなった。

世界初、カスタムオーダーシューズ「ergofit」を発売

2020年10月、同社はカスタムオーダーシューズ「エルゴフィットergofit」を発売した。ergofitは、3D足型計測器「インフットINFOOT」のサイズ測定データを使った三次元成型編みによる世界初のフルサイズカスタムオーダーシューズ。専門のアドバイザーが店頭にてINFOOTを使い、顧客の足長、足幅、足高を計測し、その測定データを元に顧客一人一人に最適なサイズの靴を提供する。

通常のブランドは、1種類の靴につき10~20通りのラスト（靴の成型に用いられる木型）しかないのに対し、ergofitはJIS規格が定めるフルサイズを網羅する150種類。足長21.0cm~28.5cm、足幅A~Gまで10段階を展開しており、日本人の足型の98%までカバーできる。また、同社の調べでは90%以上の人が左右の足の大きさが違うといったデータが出ている。片方ずつ異なるサイズで購入できるシューズブランドはないため、消費者は片方どちらかの足に合わせて靴を選び、もう片方はサイズが合っていない状態で履いていることになる。そこで、ergofitは左右異なるサイズでの注文やインソールのカスタム対応も可能とした。「メーカーが企画した靴のサイズに自分の足を合わせるしかない現状を変えたかった」と喜多社長は話す。

INFOOTでの計測後、店頭で実際に履き心地

を体験した人は「左右違うサイズを履くとはこういうことか」と人生初の体験に驚き、3人に2人は購入に至るといふ。喜多社長は「口コミヤリピーターも増えており、値段以上の価値を認めてもらったのではないかと手応えを感じている。

ergofitは靴底を除く甲を覆う部分（アッパー）がニット素材でできているため軽くて通気が良い。靴紐がなく靴下を履いているような感覚が特徴で、スポーツのトレーニングやウォーキングでの着用にも対応している。また、受注生産により廃棄ロスがなく、SDGs（持続可能な開発目標）の観点からも積極的な展開が期待される。今春販売予定の新商品には、再生ポリエステル糸を使用しており、さらなる環境負荷の低減を目指す。



3D足型計測器「インフットINFOOT」（左）「カスタムオーダーシューズの製造方法」として特許登録された「ergofit」（右）

国内製造にこだわり、自社ブランドとOEMの両輪経営

同社は国内製造にこだわる。海外生産比率が98%と言われるアパレル業界で、自社商品・OEM製品ともに全工程を国内工場で一貫管理する。「大量製造が必要な汎用品はコスト面から海外に任せざるを得ないが、当社の高付加価値製品には、日本製ならではの高い品質と機能性を感じていただけははずだ」と喜多社長は自信をみせている。実際、中国の靴下工場経営者が視察に訪れた際に「加工の難易度が高いためロスが多く、少量生産であることから中国ではとても採算が取れない」と吐露したほど高い水準の品質管理技術を誇る。

「今後も人々のアクティブライフスタイルを応援することで、健康生活の増進と地域産業の活性化に貢献したい」と熱い思いを語る喜多社長。これからも自社ブランドとOEMの両輪でさらなる経営強化を図る。（八木陽子、太田宜志）